

『ちくま評論選』解説

27 「確認されない死のなかで」 石原吉郎

■凡例

- 1 ①②：は形式段落番号。◆は、設問。  
2 ▽は、本文の追跡・分析。  
3 ▼は、読解に関する技法。  
4 ☆は、記述に関する技法。

■前提知識

□シベリア抑留問題 (小学館『日本大百科全書』より)

第二次世界大戦終結後、当時のソ連占領地区の日本軍人らが、シベリアなどに移送、労働を強いられ、日本への引揚げが大幅に遅れた問題。

▽抑留の状況

終戦時点において、満州(中国東北)、北朝鮮、千島、樺太(からふと)(サハリン)などソ連占領地域の在留日本人は、日本政府の推算では272万6000人であった。このうちソ連に抑留された人員の内訳は、関東軍を中心とした軍人・軍属が56万3000人、「満州国」官吏、協和会役員、朝鮮総督府、樺太庁の官吏などが1万2000人と推定されている。ソ連は1945年(昭和20)8月下旬から46年6月までの間に、これら日本人を1000名単位の作業大隊に編成し、各地に移送した。地域的にはシベリア47万2000人、外モンゴル1万3000人、中央アジア6万3000人、ヨーロッパ・ロシア2万5000人と推定され、捕虜収容所約1200か所、監獄その他特殊収容所約100か所に分散収容されて、採鉱、森林伐採、鉄道建設、道路工事など、主として屋外重労働に従事させられた。ソ連は、戦後の荒廃した経済の再建のために、これら日本兵を労働力として使用したのである。第二シベリア鉄道の建設には5万人の日本人が投入されている。このような措置は、日本兵の帰国を約束したポツダム宣言第9項に違反し、1929年ジュネーブで調印された「捕虜の待遇に関する条約」にもとる行為であった。

日本兵たちは、日々の労働にノルマ(労働基準)を課せられ、食糧不足、寒気、劣悪な生活環境のために、病人、死者が続出し、全体で7万人が死亡したと推定されている。このようななかで、抑留初期、望郷の思いを込めて歌われた歌が、抑留者仲間をつくった『異国の丘』(作詞増田幸治、作曲吉田正)である。この歌は1948年夏、復員兵によって日本国内に紹介され、爆発的に流行した。

▽帰還問題

ソ連地区からの抑留者送還は、他地域の送還がほぼ終了した1946年12月の米ソ協定締結後から開始された。協定では毎月5万人を送還することになっていたが、ソ連は、冬季輸送の困難、日本側受入れ準備の不備などを理由として、しばしば中断、延引し、この間、抑留者数をはじめ、捕虜に関するあらゆる情報をまったく流さなかった。このような態度に対して、日本国民さらには国際世論の要請や非難も高まった。50年4月タス通信は、戦犯、病人など少数者を除く51万人の送還は完了したと声明、これに対し、日本政府はなお約37万人が未帰還であるとして、5月、国連に提訴した。さらに翌年2月引揚援護庁は、未帰還者34万0585人、うち生存者7万7637人と発表した。これについてのソ連の回答はなかった。その後、53年11月の日ソ赤十字社の協定によって、戦犯として抑留されていた日本人の送還が行われ、さらに日ソ国交回復に関する共同宣言発効後の56年12月26日、最後の集団帰国者1025人を乗せた興安丸が舞鶴に入港した。

しかし行方不明者は多数に上っており、なおかなりの自発的および強制的残留者がいるといわれる。(若槻泰雄)

□「無名戦士の墓」への抵抗

一人の抑留生還者が次のようなホームページを公開している。

「市井の一人人がパソコンと格闘すること10年、かつての戦友たちを『無名戦士』と虚飾して歴史の壁に埋め戻そうとする風潮に抗い、あえてその名を掘り起こし、その命日と最期の地を明らかにして、人間としての存在証明とその無念の死を追悼すべく、ようやく4万6300名の『シベリア抑留死亡者データベース』を完成いたしました。」

「シベリア抑留中死亡者名簿 村山常雄」<http://yokuryu.hnu.cc/> (見る) ことができる。氏名不明のままの人も数多い。

■見通しと追跡

□見通し ①②の問題意識をすばやくつかむ。「ひとりひとりの死がないということが、私にはおそろしい」。これである。26には、「私は、無名戦士という名称に、いきどおりに似た反発をおぼえる」とある。モチーフは一貫している。

この文章の読みのポイントは、論理構成だの、主題文だのといった形式的な問題にあるのではない。この、「おそろしさ」「いきどおり」として表されている(実感)をできるかぎり正確につかんで、ことばに置き換えることが、私たちの仕事である。

このような文章を出題する大学はあるか。ある。

あるどころか、国語でしか問えない主題にふれ、国語でしか測れない力を見るために、まっとうな大学であればあるほど、出す。

その主題と力とは何か。

それは、「死／生」という主題と、「決して経験できない経験を、ことばによって追体験できる」力、である。

①●百人の死は悲劇だが

百万人の死は統計だ。

アイヒマン

▽「アイヒマン裁判」という有名な裁判がある。これについては、ハンナ・アレント(思想家・女性)が『イェルサレムのアイヒマン―悪の陳腐さについての報告』という本を書いているし、『スペシャリスト』という裁判の記録映画もある。

アイヒマンとは何者か。事典の記述から引用する。

彼は、ナチス・ドイツのユダヤ人虐殺の責任者である。ドイツ生まれだが青少年時代をオーストリアで過ごし、一九三二年オーストリア・ナチ党入党。ドイツ語ができたところから、ウィーンに設置されたユダヤ人移住局の責任者となり、のちに国家保安警察本部(RSHA)のユダヤ人担当課(第四局B4)課長となる。親衛隊中佐の身分だったが、ドイツ占領下のヨーロッパのユダヤ人取締りの中心人物だった。彼の指揮で逮捕され、強制収容所で殺されたユダヤ人は六〇〇万人。敗戦時、米軍に捕らえられたが脱走。六〇年、アルゼンチン、ブエノス・アイレス郊外に家族とともに潜んでいるところをイスラエル秘密警察に突き止められ、勤務先から帰宅途中、強制的に連行されイスラエルまで秘密裏に護送された。裁判はエルサレムで六一年四月から四か月間開か

れ、同年一二月に死刑判決、翌年死刑執行。「一人の死は悲劇であっても、数百万の死は統計上の問題にすぎない」というのは、公判中の発言。

こう聞くと、ホロコーストの実行責任者という、悪魔の意志をもった男のように思えるが、裁判を通してわかったのは、じつは彼が、じつに凡庸な人間だということだった。いわば、たんに仕事に忠実な、その意味では有能な(スペシャリスト)にすぎなかったのである。アレントの本の「悪の陳腐さについての報告」という副題はそれを表している。

人間は「殺人などできそうにないふつうの人間だ」百万人を殺す仕事を与えられたとき、それを仕事として、たんたんとやり遂げてしまうものなのか。アイヒマンの例は、その問いに対して、「そうだ」という答えを届けてよす。

② ●「読1」ジェノサイド(大量殺戮)という言葉は、私にはついに理解できない言葉である。ただ、この言葉のおそろしさだけは実感できる。ジェノサイドのおそろしさは、一時に大量の人間が殺戮されることにあるのではない。そのなかに、ひとりひとりの死がないということが、私にはおそろしいのだ。人間が被害においてついに自立できず、ただ集団であるにすぎないときは、その死においても自立することなく、集団のままであるだろう。死においてただ数であるとき、それは絶望そのものである。人は死において、ひとりひとりその名を呼ばなければならないものなのだ。▽たんなるいかえとか説明というのではなく、ここでいわれていることを実感できるまで噛みしめてみてほしい。

一人が亡くなる事件と、千人が亡くなる事件のどちらがおそろしいか。犠牲者の数が多いほど、大きな事件なのか。たしかに、事故、災害、戦争などの報道において、犠牲者の数が多い場合はより大きな扱いになるだろう。

しかし、一方、私たちは、数というものにすぐに慣れてしまう。災害や戦闘の報道を思い起こしてみよ。初めの一人二人の死に対しては、その名が記され、死の状況も伝えられる。しかし、死者の数が増えるにつれ、氏名は羅列になり、やがて、ただの数字に変わる。「イラクでは、今月に入って米兵の死者が何人になった」といった扱いになるのである。

それでも通常の場合は、いくら多数の死であっても、それを弔う人はいるだろう。しかし、ジェノサイドと呼ばれる事態に至っては、弔う者も弔われる者も同じように死ぬ。集団として、数として死ぬしかない。これが石原のいう「絶望」である。

これは私(梶井)の感想だが、死において名が呼ばれないことが絶望なら、生において名が呼ばれないこともまた絶望であろう。

③ ●「みじかくも美しく燃え」という映画を私は見なかった。だが、そのラストシーンについて嵯峨信之氏が語るのを聞いたとき、不思議な感動をおぼえた。映画は、心中を決意した男女が、死場所を求めて急ぐ場面で終わるが、最後に路傍で出会った見知らぬ男に、男が名前をたずね、そして自分の名を告げて去る。

④ ●私がこの話を聞いたとき考えたのは、死にさいして、最後にいかんともしがた

く人間に残されるのは、彼がその死の瞬間まで存在したことを、誰かに確認させたいという希求であり、同時にそれは、彼が結局は彼として死んだということを確認させたいという衝動ではないかということであった。そしてその確認の手段として、最後に彼に残されたものは、彼の名前だけだという事実は、背すじが寒くなるような承認である。にもかかわらず、それが、彼に残された◆1ただ一つの証しであるとき、人は祈るような思いで、おのれの名におのれの存在のすべてを賭けるだろう。▽なぜ、生きた証しは「名」でしかありえないのか。肉体は？ 財産は？ 履歴は？ このような疑問が湧くだろう。それをもつたまま次に進む。

◆問1「ただ一つの証し」とは何の証しか。(ほぼ抜き出し)  
二つの「させたい」に注目。

「解答例」「彼がその死の瞬間まで存在した」と彼が結局は彼として死んだということ。

ここには他のだれでもない、この名を持つ「彼」、という意味が込められている。もちろん、そこまで書いてもかまわない。

⑤ ●いわば一個の符号にすぎない一人の名前が、一人の人間にとってそれほど決定的な意味を持つのはなぜか。それは、まさしくそれが、一個のまぎれがたい符号だからであり、それが単なる番号におけるような連続性を、はっきりと拒んでいるからにほかならない。ここでは、疎外ということはむしろ救いであり、峻別されることは祝福である。

▽名前とは、たしかに、ひとりの人間を表す符号(記号)であるが、一般的な記号とは決定的な違いをもっている。一般的な記号は、類似的な性質によってまとめられた何らかの存在を意味するようにつけられる。たとえば、複数の脚に支えられた平面の台を有する家具を「机」という記号で呼ぶ。「机」が必要だ、といわれたとき、もっていくのはあの机でもいいしこの机でもいい。一方、固有名(名前)とは、他と交換不可能な、時間的空間的な広がりをもつ宇宙にただ一つの存在に対してつけられた記号である。たとえば、徳川家康と名付けられた、あの人間は、他とは交換不能な一回きりの存在である。「將軍」は交換できても、家康という固有名は交換できない。「番号」におけるような連続性」といわれているが、たとえば、出席番号は、記号であるが、固有名ではない。三年何組何番と呼ばれることで、私たちは、集団に取り込まれるが、名を呼ばれることで、他とは異なる存在として、集団から切り離される。

⑥ ●私がこう考えるのは、敗戦後シベリヤの強制収容所で、ほぼこれとおなじ実感をもったからである。

▽同じ実感Ⅱ人は死において、ひとりひとりその名を呼ばなければならない、とい

う思い。

⑦ ●私は昭和二十四年から二十五年にかけて、バイカル湖西方バム鉄道沿線の密林地帯で、二十五年囚としての刑に服した。この時期は私たちにとって、入ソ後二回目の◆2「淘汰」の時期を意味した。最初の淘汰は、入ソ直後の昭和二十一年から二十二年にかけて起こり、長途の輸送による疲労、環境の激変による打撃、適応前の労働による消耗、食糧の不足、発疹チフスの流行などによって、八年の抑留期間中、もっとも多くの日本人がこの期間に死亡した。またこの期間は、何人かの捕虜と抑留者が、自殺によってみずからの死を例外的にえらびとった唯一の期間でもある。

▽一回目の淘汰（生と死の分かれ目）Ⅱソ連軍の捕虜になった初期。二回目の淘汰Ⅱ強制労働の時期。

◆問2「淘汰」とはここではどのようなことか。（ほぼ辞書的意味）  
 「解答例」「生き残るものと死ぬものに分かれること。」

⑧ ●この淘汰の期間を経たのち、死は私たちのあいだで、あきらかな例外となった。私たちの肉体は急速に環境に適応しはじめ、生きのこる機会には急速に反応する、いわゆる「収容所型」の体質へ変質して行った。

▽「収容所型」の体質」とはどのようなものか。今のような生活を送っている者にとつて、おそらくそれを実感することはむずかしい。ただ、「生きのこる機会には急速に反応する」という表現からその残酷さを想像するのみである。食べること、眠ること、労働すること、人間関係を調節すること、一つでも間違えば、「死」へ傾きかける。それをふせぐ本能が、目をぎらつかせ、人間を、「いきもの」にする。ここから、収容所で何が起きたのかが語られる。

⑨ ●このような変質は、いうまでもなく、多くの人間的に貴重なものを代償とすることによって行われる。しかしこの、◆3喪失するものと獲得するものとの間には、ある種の本能、人間の名に値する瀬戸きわで踏みとどまろうとする本能によって、かろうじてささえられるきわどいバランスがあって、人がこのバランスをついにささえきれなくなるとき、彼は人間として急速に崩壊する。淘汰の時期の衰弱のほげが、環境の変動のほげよりもはるかに大きかったのは、このためであつて、栄養失調の進行は、予想していたよりも(私たちは一回目の淘汰の経験から、当然それを予想できた)はるかに急速であつた。

▽人間的に貴重なものを喪失する代わりに、生き残るための適応を獲得する。しかし、かんたんに人間であることをやめるわけではない。人間であろうとする本能が、崩壊を支えたという。が、それも、どこかで限界を迎える。環境の変化による衰弱よりも、

支える本能の崩壊が急速な衰弱をもたらした。

◆問3「喪失するものと獲得するもの」とは何か。（ほぼ抜き出し）  
 「解答例」「人間的に貴重なものと生き残るための適応力。」

⑩ ●この時期に私は、ふたたび多数の死者を目撃しなければならなかった。第一の淘汰を切りぬけたものが、第二の淘汰に耐えなかったという事実の痛みは大きい。しかし、それが痛みとなって記憶にのぼるのは、それから数年後である。死者にかわっているどのような余裕も、◆4そのときの私にはなかった。飢餓浮腫の徴候は、私自身にもすではじまっておき、粗暴な囚人管理のもとでは、誰が生きのこるかということは、ただ数のうえでの問題であつて、一人の個人の関心の枠をすでにこえていたのである。

▽これもまた残酷な収容所の実態である。自分の生存しか考えられない。死んでいく他者への痛みは感じない。このような精神状態に陥るのである。

◆問4 「そのとき」とは具体的にいつのことか。（抜き出し）

第二の淘汰の時期である。具体的に、とあるので、⑦の記述を使う。

「解答例」「昭和二十四年から二十五年にかけて、バイカル湖西方バム鉄道沿線の密林地帯で、二十五年囚としての刑に服したとき。」

⑪ ●栄養が失調して行く過程は、フランクルが指摘するとおり、栄養の絶対的な欠乏のもので、文字どおり生命が自己の蛋白質を、さいげんもなく食いつぶして行く過程である。それが食いつくされたとき、彼は生きることをやめる。それは、単純に生きることをやめるのであつて、死ぬというようなものではない。ある朝、私の傍らで食事をしていた男が、ふいに食器を手放して居眠りをはじめた。食事は、強制収容所においては、苦痛に近いまでの幸福感にあふれた時間である。いかなる力も、そのときの囚人の手から食器をひきはなすことはできない。したがって、食事をはじめた男が、食器を手放して眠り出すということは、私には到底考えられないことであつたので、驚いてゆきぶつてみると彼はすでに死んでいた。そのときの手ごたえのなさは、すでに死に対する人間的な反応をうしなっているはずの私にとって、思いがけない◆5衝撃であつた。すでに中身が流れ去って、皮だけになった林檎をつかんだような触感、その後ながく私の記憶にのこつた。はかないというようなものではなかった。

⑫ ●「これはもう、一人の人間の死ではない。」私は、直感的にそう思った。

▽フランクルの『夜と霧』読むべし。  
 栄養失調とは、どのようなものか。この叙述から想像してみよ。「すでに中身が流れ去って、皮だけになった林檎をつかんだような触感」という表現のリアリティ。一

人の人間の死でないとすれば、何が死んだのか。

何人が犠牲になったかという数字の問題をことさらに取り上げて、その数が多いとか少ないという「事実」問題を争おうとする言説が、昔からあるし、今もある。そんなに死んでないのに、たくさん死んだかのようにするのは、被害を増やししようとする何らかの陰謀なのだ、といった論法である。加害を訴えられた側が、反論するときによく使われる。百人殺したって？ おれは十人しか殺してないよ。しかし、過去のリアリティを受け取るとは、人数の問題ではなく、この「中身が流れて、皮だけになった林檎」の感触を心の手に記憶させることである。

◆問5 「衝撃であった」のはなぜか。

国語の世界には、無造作に「なぜか」と問う設問が多い。私（榊井）は、このことに対して批判的である。この問いも、なぜか、と問うているが、実質的には、「衝撃」の内容はどのようなものであったか、というにすぎない。それなら、そう問えばいい。続く記述からまとめればいだろう。短くも長くもできる。「人間の死じゃない」という衝撃だ、というところは残したい。

「解答例」「彼の身体は、すでに中身が流れ去って、皮だけになった林檎をつかんだような触感しかなく、これはもう、一人の人間の死ではないという思いをもたらしたから。」

⑬ ●私にとってそのとき、確かなものは何ひとつ未来になかった。ただ、いつかは自分も死ぬということだけが、のがれがたく確実であり、そのことを時おり意地わるく私自身に納得させることで、「すくなくとも、今は生きている。」という事実をかるうじて確かめ、安堵していたにすぎない。だが「死ぬ」という言葉は囚人のあいだでは、すでに禁句に近いものになっていた。自殺ということは、この時期には、ほとんど私たちの念頭にのぼることはなかった。にもかかわらず「生きる」というたしかない意志表示は、もはや誰の顔にも見られなかった。誰もが、「しばらくは死なないだろう。」という裏がえしの納得で、かろうじて生きようとする意志を表明していたにすぎない。五年生きのびることさえおぼつかない環境で、二十年囚が二十五年囚に示すあらわな優越の表情は、このことをよくものがたっている。

▽少し反省すれば気づくが、この状況は、じつは原理的には、〈ふつうに〉生きている私たちの状況と同じである。いつかは死ぬ。少なくとも、今は生きている。では、何が違うか。そこでは、〈死神〉がつねに彼らの耳元でささやき続けていたという点である。彼らはそれを聞き、意識せざるを得ない。「死ぬ」ということばを私たちは、安易に使うが、彼らはそれを禁句としていた。それは、口にしてしまえば、すぐにも実現してしまいそうな距離に〈死〉がいたからである。この叙述から私たちは、たとえ幻想であれ、未来に確かなものがある、という思いが、生きるという意思表示を可能にする、ということ、逆に学ぶだろう。

⑭ ●「これはもう、一人の人間の死ではない。」と私が考えたとき、私にとっては、いつかは私が死ぬということだけがかるうじて確実なことであり、そのような認識によつてしか、自分が生きていることの実感をとりもどすことができない状態にあったが、私の目の前で起こった不確かな出来事は、私自身のこのひそかな反証を苦もなくおしつぶしてしまった。

▽「確かなものは何ひとつ未来になかった」私にとって、一つだけ確実なもの、それが「いつか私が死ぬ」という思い。でも、今は生きている、これは確かだ。こうして、私はようやく〈生きている〉実感をとりもどす。

しかし、その確実な死とは、このような死なのか。これはもう、一人の人間の死ではない。死という確実性が揺らぐ。確実性のゆらぎは、反射して、生きていることの実感をぐらつかせる。

⑮ ●しかし、その衝撃にひきつづいてやって来た反省は、さらに悪いものであった。それは、自分自身の死の確かさによってしか確かめえないほどの、生の実感というものが、一体私にあったらどうかという疑問である。こういう動揺がはじまるときに、その人間にとって実質的な死のはじまりであることに、のちになって私は気づいた。この問いが、避けることのできないものであるならば、生への反省がはじまるやいなや、私たちの死は、実質的にはじまっているのかも知れないのだ。

▽生の実感なんてあったのか。これは危険な問いだ。生を疑い出すとき、〈死神〉が私たちにとりつく。極限的な状況で見据えられた真実。

⑯ ●人間はある時刻を境に、生と死の間を断ちおとされるのではなく、不断に生と死の領域のあいまいな入れかわりのなかにいる、というそのときの認識には、およそ一片の救いもなかったが、承認させられたという事実だけは、どうしようもないものとして私のなかに残った。

▽これも、凡庸な時間を生きる人間には気づかれない事実。ある瞬間生↓死へと転換すると私たちは思っている。しかし、私たちの中には、生と死のグレーゾーンがあるというのだ。生理的生命機能は維持されていても、すでに死は始まっている、という状態とはどのようなものか。石原にはそういう状態が確かにあることに気づく。否定したくても、否定しきれない真実として心に残り、彼は、この文章をつづる。

⑰ ●私があるときゆきぶつたものは、もはや死体であることをすらやめたものであり、彼にも一個の姓名があり、その姓名において営まれた過去があったということなど到底信じがたいような、不可解な物質であったが、「それにもかかわらず、それは、他者とはついにまぎれがたい一個の死体として確認されなければならず、埋葬にさいしては明確にその姓名を呼ばれなければならなかったものである。」

▽一文できてきている。前半は事実。機能は停止しているが人間の形を保っている物を死体と呼ぶならば、〈それ〉は人間であったことを思い起こさせないような物質であった。後半は主張。石原は、しかしそれでも、他と区別された固有名をもつ人間として埋葬せよという。

⑱ ●その男が死んでしばらくたったある寒い朝、一人のルーマニア人が森林伐採の現場で、切りたおされた樹の下じきになって死んだ。氷点下四十度に近い極寒の日であったため、腐敗のおそれのない彼の死体は、夕方まで現場に放置され、作業終了後、櫛で収容所へはこばれたのち、所内の営倉へ投げこまれた。

⑲ ●その夜、バラックの施設に近い時刻に、夜間の使役を終えた私は、なにげなく営倉に立ち寄ってみた。営倉は半地下牢であったため、ほぼ上から見おろす位置でなかの死体を見ることができた。死体は逃亡のおそれがないとみられたわけであるう、営倉へ半分押しこんであるだけで、開かれた戸口から外側へはみ出た下半身は、あきらかに俯伏させていた。私の目がその下半身をたどって、雪明かりのなかで上半身にとどいたとき、思わず私は息をのんだ。上半身が仰向いていたからである。死体の胴がねじ切れていたことに気づくには、それほど時間を必要としなかった。私はまっしぐらにバラックへ逃げかえった。その時の私のいつわりのない気持ちは、一刻でも早く死体から遠ざかりたいということであった。「あれがほんとうの死体だ。」という悲鳴のようなものが、バラックの戸口まで、私の背なかにびったりついて来た。

⑳ ●氷点下四十度をすでにくだった気温にもかかわらず、むっと寝息のこもったバラックのなかで、最初に私が考えたことは「人間は決してあのように死んではならない。」ということであった。

▽目を背けたくなる場面だが、あなたが、この描写によってイメージしたものを覚えておきなさい。暴力が蔓延し、死が常態となり、人間が人間でなくなるとき、出現する光景とはこのようなものである。

「人間は決してあのように死んではならない」という石原の叫びは何を意味しているのだろうか。上半身と下半身がねじ切れて反転しているということ、そして、何より、それがそのまま放置されているということ。「あのように」というのは、このことを指している。それは、人間の形態ではない。人間が、完全に、物体、物質となつたときの残酷さやおぞましがここにある。

このことは、石原が、人間は固有名で呼ばなければならない、といっていることと関係している。固有名で呼ばれる人間とは、〈顔〉をもった一つの全体である。名前は、その手を指しているわけでもなく、脳を指しているわけでもなく、ある自立した生きた全体を指している。ねじ切れた死体の放置は、収容所が、その全体性の崩壊に対して反応しなくなった空間であることを意味している。そういった空間では、人は名前を持たず、すべてが番号か、あるいは数になる。

21 ●一人の日本人と一人のルーマニア人、この二つの死体の記憶をもって、私は、入ソ後の最悪の一年を生きのびた。私が生きのびたのは、おそらく偶然によってであったろう。生きるべくして生きのびたと、私は思わない。だが、偶然であればこそ、一個の死体が確認されなければならず、一人の死者の名が記憶されなければならないのである。

▽二つの死体は記憶されるべきだ。この倫理観はどこから来るのか。それは、「私は偶然生きのびた」という認識から来る。〈私〉の生存が偶然であることの裏返しは、彼らの死も偶然だということである。〈私〉こそがあの死体であったかもしれない。いや、石原はほとんど、あれは自分の死体だと思っている。

22 ●その後、私はハバロフスクへ移され、生命力の緩慢な回復の時期に、かつて見たルーマニア人の死体を、悪夢のように憶い出すことがあった。人間は決してあのように死んではならないという実感は、容易に、人間は死んではならないのだという断定へ拡張された。それは今もなお変わらない。人間は死んではならない。死は、人間の側からは、あくまでも理不尽なものであり、ありうべからざるものであり、絶対に起こってはならないものである。そういう認識は、死を一般の承認の場から、単独な一個の死体、一人の具体的な死者の名へ一挙に引きもどすときに、はじめて成立するのであり、◆6そのような認識が成立しない場所では、死についての、同時に生についてのどのような発言も成立しない。死がありうべからざる、理不尽なことであればこそ、どのような大量の殺戮のなかからでも、一人の例外的な死者を掘りおこさなければならぬのである。大量殺戮を量の恐怖としてのみ理解するなら、問題のもっとも切実な視点は即座に脱落するだろう。

▽「人間は死んではならない」とはどういうことか。石原のいう「人間」とは、宇宙に一個の固有名をもつ、空前絶後の単独の存在である。それが死んで死体となったとき、石原の経験した空間では、名前を引きはがされ、モノとして冒瀆された。単独の一個の人間であることが否定される場が、大量殺戮の場である。一個の具体的な存在である人間にとって、死はすべてを一般化してしまう発想は、相容れない。

◆問6 「そのような認識」とはどのような認識か。(抜き出し)

「解答例」「死は、人間の側からは、あくまでも理不尽なものであり、ありうべからざるものであり、絶対に起こってはならないものであるという認識。」

23 ●生き残ったという複雑なよろこびには、どうしようもないうしろめたさが最後までつきまとう。さまざまな場所私が出会わざるをえなかった他の人の死も、手さびしく私を拒んだ。私は誰の死にも、結局は参加できずにとり残された。私はどん

な他人の死からも、結局はしめ出された。そしてこのような拒絶は、最後に◆7自分  
が他人を、全世界をしめ出すときまで、さいげんもなくくり返されるにちがいない。  
生きている限り、生き残ったという実感はどのようにしてもつきまとう。単独な生者  
として、単独な死に立ち会わざるをえなかったことが、その理由である。

◆問7 「自分が他人を、全世界をしめ出すとき」とはどのようなときか。

☆切り身の方法、で、いいかえよ。「自分が／他人を、／全世界を／しめ出すとき」

自分⇨死者となつた自分。他人⇨生き残っている他人。全世界⇨生きてい  
る人間の世  
界。閉め出す⇨関係を絶つ。

「解答例」「自分が死者となつて、生き残っている他人や生きている人間の世界と関  
係を絶つとき。」

24 ●死は、死の側からだけの一方的な死であつて、私たちの側——私たちが私たち  
であるかぎり、私たちは常に生の側にいる——からは、なんの意味もそれにつけ加え  
ることはできない。死はどのような意味もつけ加えられることなしに、それ自身重大  
であり、しかもその重大さが、おそらく私たちにはなんのかわりもないという発見  
は、私たちの生を必然的に頽廢させるだろう。しかしその頽廢のなかから、無数の死  
へ、無数の無名の死へ拡散することは、さらに大きな頽廢であると私は考えざるをえ  
ない。「読2」生においても、死においても、ついに単独であること。それが一切の  
発想の基点である。

▽ここもまた、記憶しておくべき重要な段落である。私たちは、生においても、死に  
おいても、ついに単独である。ここから目をそらしてはならない。

「死は、死の側からだけの一方的な死だ」というのは、生の側から（死）に意味づ  
けしようとすることに対する拒絶である。意味のある死などない、という冷徹な認識  
もまた、私たちが受け取るべき認識である。が、これは受け取りがたい。私たちはゴ  
ールに意味を見出すことによって、生を保とうとするからである。宗教も、ナシヨナ  
リズムも、死に意味を与えようとするであろう。しかし、石原は自身の体験から死は  
生と何の関わりもないと結論する。

そのことによつて、生の実感が失われるおそれはある。しかし、もつと悪いこと、  
それは、無数の無名の死、といったものを承認してしまうことである。無数の無名の  
戦士の死によつて、今の平和がもたらされたのである、といった（物語）を承認する  
ことは、私たちの単独性を塗り込め、あの死体のリアリティを塗り込めてしまう欺瞞  
にほかならない。

25 ●私は広島について、どのような発言をする意志ももたないが、それは、私が広  
島の目撃者でないというただ一つの理由からである。しかしそのうえで、あえていわ

せてもらえないなら、峠三吉の悲惨は、◆8最後まで峠三吉ただ一人の悲惨である。こ  
の悲惨を不特定の、死者の集団の悲惨に置き代えること、さらに未来の死者の悲惨ま  
でもそれによつて先取りしようとすることは、生き残ったものの不遜である。それが  
ただ一人の悲惨であることが、つぐないがたい痛みのすべてである。

▽24の補足。

◆問8 「最後まで峠三吉ただ一人の悲惨である」とはどのようなことか。

24で述べられた〈単独性〉という発想を具体例に適用しているところ。☆傍線部を  
延長して、「峠三吉の悲惨は、／峠三吉ただ一人の悲惨であるということ」とした上  
で、単独というキーワードを入れて、補つていこう。

「峠三吉の悲惨な被爆体験は、峠三吉という単独の人間が経験した固有の経験である  
ということ。」

さらに、後につく「この悲惨を不特定の、死者の集団の悲惨に置き代えること、さ  
らに未来の死者の悲惨までもそれによつて先取りしようとする」とはできない、と  
いう内容を加えてもよい。

「解答例」「峠三吉の悲惨な被爆体験は、峠三吉という単独の人間が体験した固有の  
体験であり、他の不特定の死者の体験を代表させることはできないものであるとい  
うこと。」

26 ●さらに私は、無名戦士という名称に、いきどおりに似た反発をおぼえる。無名  
という名称がありうるはずはない。倒れた兵士の一人一人には、確かな名称があつた  
はずである。不幸にして、そのひとつひとつを確かめえなかつたというのであれば、  
痛恨をこめてそのむねを、戦士の名称へ併記すべきである。

27 ●ハバロフスク市の一角に、儀礼的に配列された日本人の墓標には、いまなお、  
索引のための番号が付されたままである。

▽「死において名を呼ばれるべきである」という主旨の一貫性が確認できるだろう。

私（榊井）の父の、一番上の兄は太平洋戦争のとき、ニューギニア方面で戦死した。遺  
骨も何もない。故郷の墓には、「ニューギニア方面」とあるだけである。彼が実際に  
つどこでどのようにして命を落としたのか、それは永遠にわからない。戦争で死ぬと  
は、そのように死ぬことである。石原は、兵士一人一人に名があつたはずだというが、  
現実には、彼らの名前は剥奪される。峠三吉は、「ちちをかえせ ははをかえせ」と  
しよりをかえせ／こどもをかえせ／わたしをかえせ わたしにつながる／にげんを  
かえせ」とうたったが、戦争において奪われた（人間）はかえつてこない。愚かな私  
たちは、このような歴史を経ているにもかかわらず、戦争ができる状態を望む欲望を  
抱え続けているようである。しかし、人間であろうとする限り、私たちは、そのよう  
な欲望の一切を憎み、否定すべきである。

